

---

# 君、竜の咆哮を聞け。

井口亮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君、竜の咆哮を聞け。

### 【Nコード】

N1941BA

### 【作者名】

井口亮

### 【あらすじ】

靈歴一八六三年夏、龍元のダーザルゲツガ島空襲に端を発した第二次精霊戦争末期、龍元は北領をアルメリア共郷国に奪われ敗戦を迎えようとしていた。だが、一八六五年の冬、療養除隊していたダーザルゲツガ島空襲、ダダガルザ諸島激戦のエース『銀翼』の竜霊『銀嶺鱗・由露葉』とその竜霊剣護『浪代辰貴』が志願し、北領守護隊に配備されたことから、その敗戦のシナリオは大きく転換することとなる。第二次精霊戦争末期、北領の空を駆ける練装飛竜『銀戒』と『竜誇飛竜部隊』が辿る、敗戦の軌跡。

## 序幕 『東宮大空襲』

鈍の空から振る冷たさが、雪だと知るのに幾ばくかの時を必要とした。

灰色の緞帳に覆われた空は、はらはらと雪を舞い散らせる。

由露葉はしばらく惚けたように空を見上げ続けていた。

まさかよもや雪を再び見られるとは思わなかったからだ。

「……寒いな」

隣で同じように空を見上げる辰貴が白い息を吐きながら呟いた。

空を映す瞳は濁りきった光を称えている。

目を水平に落とせば、そこには街の無惨な残骸が横たわっていた。幼子が親を求める声、子が親を捜す声、そして、探すべき者の姿を見て泣き崩れる声が遠く聞こえる。

惨状といえば、惨状だった。

生気を失い、寒空の中、道の傍らに蹲る者、負傷してなお歩き力尽きて倒れる者、そして、僅かな食料を奪われて殺される者。

StackSizeの下で物乞いのように風雨を凌ごうとする者、倒壊した家屋に押しつぶされた者、焼けこげた四肢のみをこの世の痕跡とした者。焦げついた臭いにほのかに香る死臭も、時が過ぎればあたりを支配するのだろう。

由露葉は恐ろしさを覚え、辰貴の袖を掴む。

二人は瓦礫を踏み越え、昨夜の空襲警報が響く前までの寢床だった場所に赴く。

東宮大空爆が後の世に東宮一帯を焼け野原にした史実に残る飛竜部隊を用いた大空襲であり、『東宮に破壊を免れた建造物は大龍府のみである』と記述される。

この記述に偽りはなく、二人が幾ばくかの時を過ごした家屋も跡形もなく焼けていた。

黒く焦げ、しぼんだ木の支柱が灰材の中にいくつか傾き、立ち並

ぶだけだった。

「どう、しましょうか……」

由露葉が途方に暮れて尋ねる。

雪がちらほらと積もってきている。

外套の襟を立て、由露葉を抱えながら辰貴はこれからの身の振り方を考えねばならなかった。

龍元の冬は寒い。

雪の降る寒さの中、寒風に身をさらしていれば寒さにやられて死ぬだろう。

粗末な避難所が設けられているのが見えたが、とてもではないが全ての罹災者を受け入れることはできない。

糧食の配給を待つ人の列ができているが、おそらく彼ら全員の胃袋が満たされる量が配られることはないだろう。

日が傾けば本格的に襲ってくる寒さにやられる人も多くなる。

「……持つていけるものは、持つていこう」

辰貴は残骸の中から拾える物を拾い、ともかく移動することを決めた。

由露葉も辰貴に習い白い顔と手を煤で汚し、倒壊した家屋の柱を起こしてゆく。

僅かに蓄えていた糧食の備蓄を持つため、床の下の土に埋めておいた瓶を掘り起こす。

中には塩と米があった。

それだけで悟れるだけ、人の飢えた感性というのは鋭いものである。

飢えた目で見つめてくる人間の視線があった。

唾を飲む音が聞こえる錯覚を覚える。

どこでも一緒だ。

由露葉と辰貴はそれらの視線を受けて思い出したくもないことを思い出してしまう。

その時、そうしたように彼らを威圧の目で睨み武器となる物を手

にする。

餓鬼に落ちた人と相對するため悪鬼とならねばならねば自らが朽ちる。

誇りや虚飾は腹を満たさず、人としての尊厳は元来持ち合わせるべき獣性の前には無意味であることをよく知っていた。

「ねえ、おじちゃん……おなか空いた」

年端もいかない子供が施しを望む瞳で見上げてくる。

昨日まで隣に住んでいた子供だ。

罹災し親とはぐれたか、あるいは。

由露葉は施しをしたくなる衝動をぐつと抑えて瓶を抱える。

「失せる」

辰貴は押し殺した声でそう告げ、手にした廃材を振るう。

幼い子供を容赦なく打擲し、周囲への見せしめとする。

子供の悲鳴が耳を焼き、また、心が乾いてゆく。

辰貴が振るう暴力を諫めない自分もまた、彼と同じなのだ。

泣きながら慈悲を請う子供の視線を痛く思い、うつむく。

だが、そうして何かに申し訳なさそうにすることは酷く卑怯であることを覚え、由露葉は唇を噛むと冷酷の能面を被ることにした。

昨日まで親しげな顔で接してくれた隣人が恐怖と怨嗟の混じった嗚咽をあげて睨んでくる。

鼻を鳴らし、逃げるようにその場を去る。

俯いた顔に僅かに落ちる影は誰にも見られることはなかった。

生きて行くために彼らはいずれ徒党を組むだろう。

徒党を組まれれば、簡単に奪われる。

そのことも二人は良く知りすぎていた。

そして、最後にどのように振る舞うかも。

翌日、二人の姿が東龍宮佐瀬駐屯所にあった。

ダダガルザの銀翼、再び空を飛ぶと知る人は喜んだ。

そして、英雄は再び英雄に祭り上げられることとなる。

がしかし、それはただ、地獄を経験した者が市井に落ち、食い詰めて、生きるために選んだ苦しい方法でしかなかったというのが真実だ。

大二次精霊戦争末期、龍元という国はアルメリア共郷国に北領本土の蹂躪を許し、その国土全てを爆撃可能圏に納められ、安全な場所などどこにもなかったのである。

龍元を救い、歴史の闇に葬られた第二次精霊戦争末期の英霊、『竜誇飛竜部隊』はまだこの時、存在していなかった。

## 序幕 『東宮大空襲』（後書き）

書きかけの作品なので、不定期連載となります。

途中、用語の統一が見られないこともあるかもしれませんが、後で直します。

## 第一章 『堅津海峡奪回作戦』 1

### 第二次精霊戦争。

後の歴史家はこの戦争をそう称する。

軍事評論家はこの戦争を航空戦力の意義を明らかにし、戦争の在り方を変えた戦争と定義し、歴史家は人の精神が古い神霊から解放されたと解く。

そして、経済学者は経済活動の多くがより物質的な充足を求め始め、先進者は金銭的価値に重きを置き経済が停滞し逼迫することを解いた。

世界の歴史がゆるやかではあるが、大きな転機を迎えた。

一つの戦争が引き起こされるまでに様々な経過を経て、その過程で数多くの原因が生まれるように第二次精霊戦争が発するに至るまでも様々な理由がある。

それらは最終的に戦争が経済活動の一環であると言われるように経済の観点から見るのが一番、理解しやすい。

開戦に至る理由をそれらの理由を交えて国際上の立場の上から見ていることとしよう。

確執は古く遡り、今は世界地図から名を消したユーファン帝国の打ち立てた大霊誓約がその発端となる。

一大勢力を誇ったユーファン帝国は近隣諸国を最も進んだ魔導技術と強力な軍事力を背景に植民地、または自国の領土としてゆく。

占領した土地の通商を押さえ、また、ゆくゆくはユーファンへと帰化させるために、そして国際的支持を受けんが為に大霊誓約を現界連合の場でユーファン主導で打ち立て各国に批准を求めた。

精界 この呼称は当時のユーファン帝国のもので霊界や玄界などその土地柄で呼称がことなるが、それぞれ同じものである。と現界に座するあまねく精霊を共敬し、人霊皆が潤恵を授得せん。

この趣旨と各国協調を建前とし、現界連合でのユーファン主導の



現界政治を執り行うべく大靈誓約への批准は着々と進められる。

それらの施策は様々な障害があつたにせよ概ね滞りなくユーファン帝国の思惑通りに進んだ。

理由は大きく二つあり、一つ目はユーファンの強大な軍事力を背景とした恫喝、二つ目は現界各国に大靈誓約の建前に同調できる宗教的下地があつたからだ。

多くの宗教が時の権勢を盤石とするための喧伝であり、一つの価値観を普及させるのに大きく貢献するものとして存在するものである以上、価値観を同じとする大靈誓約について当時の情勢はこれを受け入れる準備ができていた。

或いは、受け入れられるように作られていた。

そして、最も切実な話として各国が靈息魔術から精靈魔術を用いた魔導技術を普及させるべく時代が転化していた時期でもあつた。

ユーファンは従属する国には惜しみなく技術供与をするとともにその支配を盤石なものとし、敵対する国には大靈誓約でもってして経済制裁を容赦なく加えた。

時の帝王ユーファン？世はその時代の趨勢を汲むことのできた希代の外交政治家でもあつたのだ。

東に遠く離れた孤島である龍元はその国の興りが「龍靈、現降り八網を翼に掩いて宇と成さむ」と説く、靈獣である龍が人となりその国是を導くという宗教基盤を持っていたことからして、また、立ち後れた経済戦争に勝つ為、大靈誓約を拒むことなく受け入れた。

ここで龍元の歴史についても触れねばならないのだが、龍元は大靈誓約直前まで他国との関係を断ち、独自の文化と治世を敷いていた時期がある。

が、長く続いた平穩は制度自体に腐敗を加え、大きく世界の列強から立ち後れる形となる。

内部的腐敗と外敵に対しての危機感等の様々な要因が引き金となり、その国政を改める内乱を経て改革が起こった。

その後、龍元は勤勉な精神性を有したまま、ユーファンや他の列

強から貪欲に国家運営の全てを吸収し、力を蓄え始める。

地理的にユーファンから広く大茫洋を隔てており、地理的にもその支配が強くなかったことが幸いし、通商規制を受けることなく着々と国力を蓄えることができた。

その際、極東の周辺国からは独自の精神性を捨てた俗国と、列強から竜真似する魚と揶揄されたものであるが、時代の波に取り残された龍元にとってはユーファン等の列強から学ぶことが変遷してゆく国際情勢の中で生き残る術であった。

そして、起こったのが第一次精霊戦争である。

事の発端はユーファン帝国の植民地であったアルメリアが独立を表明したことであった。

全ての原因を列挙するには暇が無いが発するに至る原因は二つある。

技術革新による供給過多と貨幣選良主義がデフレを生み、混乱した経済により国力を著しく落としたユーファン帝国が植民地に対し過大な関税をかけ、不平不満を蓄積したこと。

そして、アルメリアがユーファンの技術供与を受け精霊技術を展開させた練装技術の開発実用に至ったことが大きなものである。

ユーファンの現界での覇権を快く思わない強大国と同じようにユーファンからの独立を望む植民地の蜂起に瞬く間にユーファンの領土は減衰し始める。

はじめは、アルメリアの独立を認め、ユーファンがその覇権国としての地位を放棄することで決着がつくと思われた。

がしかし、アルメリアの練装霊獣部隊が強すぎた為に、ユーファンはアルメリアに取って変わられることとなる。

それだけではなく、アルメリアは周辺諸外国の領土も奪い、ユーファン以上の国土を有するようになりそのまま覇権国と成り代わってしまう。

その混乱に乗じて、もう一国、練装霊獣を軍備に実装した国があった。

東の小国、龍元である。

龍元は『龍霊』と呼ばれる特権階級による意志決定の遅さという政治的欠陥の為に機を失したものの、強大な軍事力を持つに至った軍部の独走により月州やテテ諸島等をその領土とした。

アルメリアが覇権国となったことで第一次精霊戦争は一応の終結となった。

こうして、世界情勢を大きく覆したアルメリアはその名を『アルメリア共郷国』とし、覇権国として現界連合を引っ張る形となった。ユーファンが大霊誓約を用いて各国を従属させた例に習い、戦勝処理を終えたアルメリアは新たに『霊長憲章』を打ち立てることとなる。

『あまねく精霊の呪縛から解き放たれ、人は真に精神の自由を得なければならぬ』

それは今まで尊いとされてきた精霊を隷属させる魔導技術の変革に伴った思考であり、宗教であった。

だが、それを拒む国もまたあった。

龍の霊たる竜霊をその支配階級に置き、その支配を盤石とする宗教の要にした龍元。

そして、アルメリアの覇権をよしとしない国々。

それら『精霊同盟』とアルメリアを中心とした『人現連合』。

龍元のダーザルゲツガ島空襲に端を発した第二次精霊戦争の火蓋は切って落とされた。

霊歴一八六三年の夏に端を発した第二次精霊戦争は一八六五年の冬を持ってしても終結を見なかった。

いや、終結の予想はあらかたついてはいた。

先制攻撃を仕掛けた龍元が大茫洋で優位に戦局を展開していた。それに大きく寄与したのが練装飛竜部隊による爆槍投下戦術である。

これまで大海獣による海上戦と、地上部隊による火力戦が戦闘の

趨勢を決していたものであるが、航空戦力という概念が加わったのである。

正確には第一次精霊戦争の時にも航空戦力というものは存在した。練装天馬部隊を使用した索敵、爆撃等の戦術は採られ、それが効果的であることは実証されていた。

だがしかし、それらはいくまで陸上部隊の進行を支援する範疇での運用であった。

その常識を覆したのがダーザルゲツガ島空襲であった。

練装した竜に搭載した魔槍でもってダーザルゲツガ島に集結した第一三アルメリア海竜団が全滅した結果をもつてして、アルメリアは戦略の基本方針を航空戦力に比重を置くことを決めた。

だがしかし、それだけの決定的打撃を与えていながら、龍元は第一次精霊戦争で力を持った陸軍と海軍がその有用性を認めながらも独立した権限を与えなかった。

熾烈を極めたダダガルザ諸島攻防戦において、ようやくその有効性と時代が戦術の転換を認識し、その開発、生産に龍元が着手したころにはアルメリアはすでに航空戦力を整え終わりつつあった。

あとは、物量に劣る龍元がアルメリアに押し切られるのにさほど時間はかからなかった。

そして、靈歴一八六五年九月一日、アルメリアは北の同盟国フロラツズイを牽制しつつ、龍元本土である北領に上陸した。

最早、この戦争は龍元、アルメリア、フロラツズイの三国が『どのような形で戦争を終結させるか』が問題であったのだ。

## 第一章 『堅津海峡奪回作戦』 2

『冬が来れば、敵は寒さに耐えきれず撤収する』

その撤収を待つて果敢に反撃すれば勝てるというのが龍元政府  
龍府の流した喧伝だった。

北領に向かう輸送飛龍『雲龍』の中でしきりにその喧伝を吹聴する新兵を振り返り、操縦席で辰貴はため息をつく。

まだ、成人はしていない少年すら兵士へと駆り立てて戦争をする国の未来が見えないほど、辰貴は盲目ではなかった。

彼らとて、そのことは薄々理解しているのだろう。

だが、安っぽい喧伝とわかっていながらもそれにすぎらなければ恐怖に負けてしまいそうになる自分を鼓舞するにはそうとわかっていても唱えなければいけない。

耐えられなく、なるまでは。

「そろそろ堅津海峡です」

計器を睨み精息を調息していた由露葉が辰貴に告げた。

「雲泳飛行に入ろうか」

北領は敵の航空勢力圏内である。

航空勢力圏内であるということは即ち、敵の海軍力が及ぶ地域であり運搬飛竜である雲竜の場合、為す術もなく誘精矢の餌食となる。少なくとも雲の上に出れば敵の哨戒蛇の索敵を躲せる可能性がある。

雲竜は雲の中を泳ぐように飛行する。

あまり、高く飛行しても敵の飛竜に発見される恐れもある。

雲の中を飛ぶのが一番、発見はされづらい。

また、雲には敵の索敵術式 精策を躲せる効果もある。

生物に備わる霊素に対し、精霊をぶつけて感触を手繰る策敵方法であり、第二次精霊戦争中に実用された索敵方法だ。

これにはいくつか欠陥があり、精霊が密集する場所 水霊の住

む水中や雲、火霊が顕現しているとされる火炎などがあれば精霊は通過できず索敵しづらいという難点も抱えている。

雲の中を飛行する、というのは同時に龍の場合、飛行するために必要な風精を継げないという難点も生じる。

飛竜の場合、飛翔するのに竜肺と呼ばれる竜体に下部に練装した肺に精息を込めて、火霊を発生させ肺気口から風霊とともに吹き出し推力を得て、翼に風霊を従わせて飛翔する。

水霊の濃い雲の中では火霊が起りづらく、また、風霊も少ない。そして、雲の中に入ると龍眼から送られる映像が白く染まる。時に、どちらの方向に飛翔しているのかわからなくなるのだ。

そのため、非常に不安定な飛行となり、長時間の飛行には適しては居ない。

だが、それを可能にするのが『竜霊手』の存在だ。

『竜霊』と呼ばれる高度に教練された精霊士が竜随に干渉し、精霊比を調整し困難な飛行を可能にする。

兵竜 飛竜、地竜、海竜の練装された竜の総称 は『竜士』と呼ばれる操縦士がおり、そして、選ばれた兵竜に『竜霊手』が座すこととなる。

『竜霊』とは『龍霊』 即ち、龍の霊を受け現界を執する霊とし人の身を持つ龍の化身であり、人の身である竜士より尊い存在であるからである。

人の戦は人の手で行うべきであるが、龍はその身魄を人に貸し与え、靈魂は人の横にあり、戦場を共にし血を流す、故に龍義に反すは人に非ず。

つまりは、『龍霊』が戦場に立たないことを非難されたくないが為、『龍霊』で家督を継ぐことのできない子息が人と共に戦うこととしたものである。

だが、竜霊が学ぶこととなる九頭竜学府でもって龍元最高の教育を受け、専門の式術 魔導の龍元での呼称 を学んだ竜霊はその式でもって高度な兵竜操作を可能とした。

銀嶺鱗・由露葉はその『竜霊』であり、浪代辰貴は由露葉に仕える『竜士』である。

ダーザルゲツガ空襲、そして、ダダガルザ諸島攻防戦で飛竜士として過ごしてきた二人にはそれでも難しい雲中飛行ではなかった。

「浪代竜士は陸竜隊の出身でありますか？」

年の若い兵士が貨室でのお喋りに飽きたのか操縦席の辰貴に声をかけてきた。

屈託の無い少年だった。

年の頃なら一八、九だろう。自分とさほど変わらない。

自分が飛竜兵となったのが一七歳であったことを考えると、長い時間を過ごしてきたようにも感じた。

「いや、海竜隊の出身だよ」

「では、ダダガルザ攻防戦には？」

「ああ、元々は第03海竜隊の『富岳』に居た」

「『富岳』では『紅閃』に？」

「いや、『黄炎』だった。『紅閃』に乗るはずだった由露……銀嶺鱗御竜の竜士が事故で亡くなられてな。『黄炎』の複座を急遽練習して運用していた」

『紅閃』、『黄炎』はともに龍元の主力飛竜である。

『紅閃』は竜霊手用の複座型、『黄炎』が単座の通常竜士用である。

辰貴はそのいずれも操縦経験があつたが、『紅閃』についてはあえて黙っていた。

「私も今度、北領で『黄炎』を預かる予定になります。先達のご指導を頂ければ幸いです！」

少年兵は感極まったように声を高める。

辰貴は色々迷った挙げ句、当たり障りの無いことを答えた。

「アルメリアの飛竜は竜剣の射程内に入ると回転して剣先を外してから大きく左に旋回して避けようとする。回転し始めた時から心持ち剣先を左に向けておくといい」

漏らすまいと真摯に聞く瞳を向けられて、辰貴は自分がかつて持っていたものを見て苦笑した。

その様子を見ていた由露葉がほんの僅かに微笑んだのを見て、ばつの悪そうな顔をする。

「浪代竜士は北領でも飛竜に？」

「……目をやられてな。飛竜は無理だ。雲竜ならまだ乗れるが……戦闘は難しい」

辰貴は嘘をついた。

もう、戦場の空を飛びたくはない。

がしかし、それを今、国防の志に火を灯す若い兵士に告げる訳にもいかず用意していた嘘をつく。

若い彼らを死地に追いやり、自らは安全な後方任務につくことに罪悪感を僅かに感じたが、それは無理矢理胸の奥に押し込んだ。

辰貴が死地に居た頃に、彼らは安全な場所に居たのだ。代わってもらうだけだ。

そう思いこむことにした。

苦々しい顔を見られたのだろうか。由露葉の表情が曇る。

「死して竜義に応じて、竜誇とせん。頑張ってくれい」

「はい！」

吐き気のする喧伝を口にした辰貴の顔を見ることなく少年兵は貨室へ戻る。

「自分は典藤勝磨と申します！北領でも機会があれば！」

名乗らんでもいいものを。

辰貴は胸中でばやきながら手を振った。

由露葉が横で沈痛な面持ちで俯いていた。

「由露葉……」

「違います……哨戒機がいます」

由露葉が竜随珠に当てた手を振るわせて呟いた。

「聞こえるのか？」

竜霊手は竜随珠を通じて竜の感覚を得ることができる。



雲泳飛行をする場合、視界を塞がれた竜の感性は耳だけになる。  
「正面、機数二……距離四八〇〇……この肺音…『ワイバーン』  
です」

「巻き雲が見つかったらおしまいだな」

巻き雲とは雲泳飛行をする竜が残す雲の乱れである。

火霊と相克する水霊が火霊を追いかけて竜に追いつき、巻かれる雲の形状からそう呼ばれる。

僅かに逡巡する。

定石では下降し、雲の下を飛ぶことで巻き雲が起ることを避けてやり過ごす。

だが、航海戦力が居た場合、間違いなく発見される。  
可能性の問題だった。

本土と北領の間に広がる堅津海峡まで敵の海上戦力が展開している可能性は少ない。

「降りる」

辰貴は操竜桿を引き上げ、雲竜を降下させた。

静かに首を降ろし、降下していく雲竜の瞳が海上を捕らえる。

「……辰貴ッ！」

由露葉が悲鳴のように小さく叫ぶ。

貨室の新兵が何事かと操縦席を覗き込もうとする。

「何があつたんで」

「発見された！近な物に掴まれッ！」

どしゅん、と大きく空気を震わせ海を割って燐光が迸る。

淡い緑の燐光を従えて飛来するのは精霊誘導式魔槍 精誘槍だ。

大気を切り裂く甲高い音を立てながら緩やかな弧を描く精誘槍が光の粒子を散らしながら飛翔、上昇する。

辰貴は竜操桿を横に倒すと、足板を踏み込む。

急激に傾いた雲竜が横滑りするように急に高度を落とし加速する。翼の先端を精誘槍が挟み、激しい炸裂音が響く。

砕け散った翼の練金装甲が飛び散り、雲竜が衝撃で横転する。

いや、横転するように操獣したのだ。

「わああ」

悲鳴の上がる雲竜の中で、翼が折れる衝撃を機体を何度も横転させて逃がす。

貨室の中が激しく物の打ち合う音で響き、肉の碎ける音がする。

由露葉が必死に竜肺の推力を調整し、均衡を保つ。

綺麗に横転を繰り返し、再び水平を保ち、辰貴は眼前の海を睨んで唸った。

「リヴァイアサル級っ……」

水面から僅かに背面の装甲を見せる練装水龍の姿が白い飛沫を上げていた。

全長200間はある巨大な潜水龍である。

鋭角的な練金外装は水霊の抵抗を受けやすいが鱗状に設けられた外殻が魚のヒレと同じ役割を果たし、結果、水中での取り回しを良くする。

背面に対空精霊誘導銃発射管6門、側面部に対衝撃殻を張り巡らし、六対一二本の竜脚にそれぞれ水精誘導三叉槍を備えている。

大注水口を兼ねる龍口部には4号級竜咆哮を備えるリヴァイサル級潜水竜は数多くの龍元海竜を屠ってきた。

「次撃、来ますっ！」

「『折る』ぞ！」

残り四本の精誘導銃発射管が開き、緑の燐光が弾ける。

燐光を吹き上げ上昇する爆散槍が雲竜に迫る。

雲竜の後部から誤誘火光精が放出される。

火霊探知型の精霊誘導槍が誤精に引つ張られるように軌道を変える。

残った音精誘導式の精誘導銃を雲竜は『翼』を根本から逸らして落下することで避けた。

雲竜が居た場所で交錯した精誘導銃が緑の光から紅蓮の炎となって爆散し、激しく空を震わせる。

翼を折り、落下する形となった雲竜はためかせるように翼を広げ、肺気口を爆発させるように風火精をはき出し、風精揚気を得る。

『逸翼』と呼ばれる飛行方だ。

精誘槍を放ち切った水龍が海面から顔を覗かせ、口腔から空に向けて竜咆哮を放たれる。

安定しきる前に無理に機体を傾け、ぎしぎしと雲竜の練金装甲が軋む。

貨室で響く悲鳴を躊躇する暇も無く辰貴は竜操桿を手繰り、機体を安定させる。

リヴァイアサル級の攻撃を避けきった矢先だ。

上空に抜けた精誘槍を見た飛竜が雲を抜けて現れる。

「ワイバーン、引き返して来ます！会敵ッ！」

「浪代竜士　！」

新兵が何かを訴えようとするが、それに構っている暇はなかった。

肉眼でワイバーンの竜影を捕らえる。

双発式竜肺と可変後退翼式の主翼と背面にある二枚の背角が特徴的な機体で、一对二本の竜足にそれぞれ三本ずつの精誘槍を抱えている。

竜角に火精竜剣、竜顎に二号竜咆哮を主兵装として持つ第二次精霊戦争末期に登場したアルメリアの主力戦闘飛竜だ。

自衛用の竜剣を二振りしか主翼に持たない雲竜では相手になるものではない。

「雲の中に逃げ込む」

猛禽が獲物を見つけたような獰猛さでワイバーンが雲竜に肉薄する。

竜角にしつらえられた竜剣が赤く光を放ち、震える。

放たれた火精弾頭が大気を切り裂き火線を作った。

雲竜の背中をいくつか貫き、火を噴き貨室で悲鳴があがる。

上下に交錯したワイバーンから逃げるように高度を取り、雲の中に飛び込む

追ってワイバーンが雲の中に入り、雲竜を追う。

雲の中といえど、全くの無視界ではない。

肺気口からはき出される精炎の光や、減衰した精策波で索敵が可能なのだ。

ワイバーンがぐるぐると周囲を回り、雲竜を探す。

風精を継ぐ為に雲の上空に浮かび、そして、巻き雲を見定めてその進行予測先に降下する。

そして、竜剣の火弾をはき出しては雲竜を削る。

辰貴は雲の中で飛竜を横に滑らせ火弾を逸らし、由露葉は肺気口からはき出される精炎と精霊比を調整し、限りなく失速するギリギリの領域で機体を制御する。

「……小南田ッ！しつかりしろ小南田ッ！」

貨室で混乱し悲鳴を上げる連中に気を持っていかれそうになる。

自分も喚くことができればどれほど楽かと思い、憎く思いながらも由露葉は辰貴を見た。

辰貴は静かな目で竜眼から見える敵の姿を監察していた。

雲竜とワイバーンの違いは低速域での揚気安定性である。

運搬用飛竜の雲竜はその特性上、広く主翼を広げており、戦闘飛竜であるワイバーンは比較して小さい。

高速域はワイバーンに圧倒的な軍配があがるが、低速域では雲竜の方が安定する。

雲竜の最低速度を下回る速度で飛行すればワイバーンは揚気を失い失速する。

ワイバーンは攻撃に失敗すれば旋回し、再度、後ろや前から攻撃位置を取り直さなければならない。

圧倒的に不利ではあるが、機会はそこにしかない。

辰貴は粘つく唾を飲み下すと、雲の上に出る。

「被補足！槍！」

「逸らす！」

頭を出した雲竜めがけワイバーンの精誘槍が放たれる。

瞬間、翼を置んだ雲竜が雲の中に沈む。

上空を通り抜けようとする、ワイバーンの腹が見えた。躊躇無く竜剣の引き金を引く。

放たれた火精が雲を破りワイバーンの片肺を貫き、破った。

零れ出る精光が黄緑の光を散らし、追って精炎が破れた穴から伸び上がり練装を焼く。

「下、もう一尾！」

気を配っていたツモリだった。

雲の下から攻撃しようとして上昇してきたワイバーンと交錯する。

ワイバーンの竜士 アルメリアでは竜騎兵と呼ばれる も、

雲竜が翼を畳んでいるとは思わず、降下速度を誤り攻撃の機会を失する。

雲を抜けて翼を広げ、激しく精炎をはき出し均衡を取った雲竜はそのまま再び雲の中に飛び込む。

「え、あ！…真上っ！」

宙返りして再度攻撃しようとしたワイバーンと雲の中で再びまみえる。

竜咆哮が煌々と紅蓮の炎を含み、吐き出さんとされる。

「きやあああつ！」

由露葉が悲鳴を上げ、目を瞑る。

貨室が兵達の悲鳴で埋め尽くされ、辰貴は恐怖の中で操竜桿を倒した。

吐き出された竜咆哮が赤黒い炎となって雲龍に迫る。

その場で横転を始めた雲竜の腹を焼き、交錯しようとしたワイバーンの首を横殴りに、雲竜の翼がへし折った。

同時に雲竜の翼がひしゃげ、折れる。

上空に抜け、遅れて海面に突き刺さった竜咆哮が盛大な水柱を上げ、追いかけるように首を折られたワイバーンが墜落してもう一本、水柱を作った。

計器類が滅茶苦茶な動きをし、機体がばりばりと震える。

それでも操竜桿を手繰り、速桿を押し込み機体を安定させようとする。

「由露葉！精霊比！繰り返し逸らせる！」

辰貴が叫ぶが、恐慌に陥った由露葉が正気を取り戻すことは難しかった。

気の遠くなりそうな時間だった。

何度も何度も翼を畳み、広げる。

文字通り、羽ばたいて均衡を取ろうとしていたのだ。

「飛べっ！飛べ！くそっ！飛べったら飛べよっ！っガああアッ！」

片翼が半ばから折れた状態では速度比を誤れば即座に均衡を崩す。

「怯えないで！竜がっ！この子がっ！」

由露葉が泣きながら叫ぶ。

竜肺口から吐き出される精炎を速桿で操り、竜鐙で偏向膜を休む

ことなく動かす。

そうして、不格好なまでに空を飛び続け、雲を抜けた先に見えた。

龍元北領。

第二次精霊戦争でダダガルザに次ぐ、激戦地である。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1941ba/>

---

君、竜の咆哮を聞け。

2012年1月5日21時45分発行